

ドミニコ会的生活と人間性 —聖性の探求についての一考察—

Vida Dominicana y Humanidad

—Una reflexión acerca de la búsqueda de la santidad—

宮 武 信 枝

はじめに

2018年3月19日、教皇フランシスコは、「聖性」をテーマにした使徒的勧告『喜びに喜べ——現代世界における聖性』を発表した。すべての人が聖性に招かれていることを強調し、「わたしのささやかな目標は、現代に合った实际的なしかたで、危険、挑戦、機会も含めた聖性への呼びかけを、あらためて響かせることです」と呼びかける¹。誰か特別な「聖人」のことではなく、他人事でもなく、それぞれ自分が「生身の人間」として日々生きようとする聖性である。

また、説教者兄弟会（ドミニコ会）総長ブルーノ・カドレは、2018年8月6日、会員に向けた書簡『ドミニコの聖性——説教者会への光』を発信した²。2021年8月6日の聖ドミニコ帰天800周年記念を準備するべく、文字通り聖ドミニコの「聖性」をテーマとし、ドミニコの召命の「人間性」が深く結びついていることを強調している。

これら二つのメッセージに共通したテーマは「聖性」および「人間性」、共通の土台は、言うまでもなくイエス・キリスト、聖そのものの神であり人となって当時の人々と一緒に生活したイエスである。この意味で、いわゆる「聖と俗」は、断絶し対立的に扱われるものではない。イエスの生涯において、またドミニコの生涯において、天上と地上、聖性と人間性は、いわば「吹き抜け」になっている。「人間性」に欠けた「聖性」はあり得ない。

日常生活の中で、「人間性（がよい・よくない）」、「人間味（がある・豊か、ない・乏しい・欠ける）」、「人間的」、「人間らしい」、「人間くさい」といった表現が使われる。ナザレのイエスとドミニコの生き様へのアプローチをもとに、ドミニコ会的生活、福音的使徒的生活の中で、聖性

と人間性との一致を探求しながら生きることについて考察していく。

1 聖ドミニコの人間性と聖性

総長ブルーノ・カドレは、書簡『ドミニコの聖性』を、800周年を記念しようとするドミニコの帰天の描写と「平和の遺書」と呼ばれる彼の遺言で始めている——「彼は彼らに言いました、『最愛の兄弟たち、あなた方への正当な相続財産について、息子としてあなた方に私が遺産として贈ることがここにあります。慈愛を持ちなさい。謙遜を保ちなさい、自発的な清貧を抱きなさい』」³。

ドミニコの最期の姿と言葉も、会の初期から兄弟（会員）によって大切に受け継がれてきた。興味深いのは、初期の伝記『聖ドミニコ伝』にも見られるこの「平和の遺書」とともに、ドミニコの後継者、第2代総長ジョルダヌス・デ・サクソニアが『説教者修道会創立史』に書き記した言葉である。「婦人に対する、特に若い婦人との疑わしく思われるような交際はすべて避けるように」という訓戒と、ドミニコ自身の謙虚で単純率直な告白である。「今まで聖なる御あわれみが、肉の腐敗から私を守って来て下さった。しかし、それにもかかわらず、年老いた婦人よりも若い婦人と話しをする方が楽しい、という徳の未熟から免れることのできなかつたことを私は告白する」⁴。

実に自然な、筆者などは不遜ながら微笑ましく感じるほどの告白である。ドミニコのことだから、臨終の苦しみの最中でも、はにかみながら苦笑気味に告白したのではないかとさえ想像してしまう。あわせて、いわゆる「聖人らしい」、いかにも中世の聖人伝らしい話だけでない「人間らしい」エピソードが書き残されたことの意義も感じられる。それは、新約聖書、とりわけ福音書に、いわば「人間臭い」ありのままの使徒たちの話も隠すことなく伝承されてきたのに似ている。神は、あくまでも「生身の人間」に働く。また、人間として愛し愛されないような聖人はいない。最期にこのような告白をしたドミニコが、いかに人間的魅力にあふれ、多くの人々と人間味豊かな交流をもち、一人ひとりを受しまた愛される生涯を送ったか、その証しといってもよいであろう。初期の伝記が描くドミニコは、中世の聖人伝らしい表現で描かれたものによれば、このような人間像であった。

慈悲とあわれみによって心が動くとき以外は、心の平静は確固たるものであった。そして心が喜びにあふれていたのも顔は輝き、その慎み深い明るさのある外観と喜ばしげな顔は心の内の安らぎを示していた。…彼の誇り高い良心の証である顔は、豊かな喜びの光に明るかった。しかしその明るさは地上のものではなかった。この喜びにあふれた明るさは、みなへの親愛感をたやすく得、彼を見た人の心には自らすぐに愛情がわいた。…全ての異端者を広い愛

の心の中に包含し、みなを愛したので、彼はみなに愛された。あわれみに満ち、隣人の利益のためおよび悲嘆にくれる者を救うために身を捧げ、喜ぶ人とともに喜び、悲しむ者とともに泣くことを会得していた。そして、みなに快く思われたのは、常に誠実な道をたどり、一度として言葉にも行ないにも二重性や偽りを見せなかったことである⁵。

修道会史もほぼ同様で、「日中は、修道士や伴っている人びとと交わったが、彼より親しみやすく、優しい人はいなかった。…すべての人が、彼の心の無限の愛の中に抱かれ、彼はみなを愛し、そしてみなに愛された」と叙述している⁶。

総長ブルーノ・カドレは、書簡『ドミニコの聖性』の中に、「御子の姿に似た説教者の人間性」という一つの章を設け、ドミニコの人間性と聖性との一貫性に着目するよう呼びかける。

「救い主の優しさと人間性を、主のしもべドミニコのうちに輝き出させた神が、あなた方を御子の似姿として下さるように」。聖ドミニコの典礼の祝日中になされる荘厳祝福のこの定式は、ドミニコの聖性の中心を示しています。全聖人祝日の中で、彼一人だけにこの「優しさ」が帰せられています。この優しさは、御子が人間性をとって来られた神秘と関連しています。私達の救い主、御子の托身のこの神秘は、兄弟ドミニコの説教において非常に本質的なことなので、それは、いわば彼自身の人間性の内的光となりました。福音の説教に全生涯を捧げることへのドミニコの召命は、彼を動かして、人間性の深みへと彼自身を導く道を、托身の中に見出すようにさせました⁷。

総長はここで、ドミニコの人間性、特に優しさが、人間となったイエスの神秘に由来することを述べる。さらに、ドミニコの深い人間性の中でも顕著な特徴として、優しさのほか、「単純さ、共感、質素、友情」を挙げる。これについてもイエスとの類似を指摘する。

彼には、他の人達と友情を築くこと以上に愛することは他になく、このことを、生命のみことばを分かち合うことのために、習慣的パターンとしています。これは、他の人達のところに近く来られる方の単純な人間性で、そのことについて、トマス・アクイナスは、イエスの生涯について話し、「彼は親しくなろうとした」とよく言いました⁸。

日本語表現の「愛」、「愛情」、「友情」などとキリスト教における訳語「愛」の使い方との相違があるろうし、デリケートさも必要とされる。しかし、元総長ティモシー・ラドクリフは、「私たちドミニコ会員にとって、愛することを学ぶことは、神による人類の救いの秘義の虜になってしまうことなしにはあり得ません。これが私たちの愛の学び舎です。よく均衡のとれた、外見上乱

れた思いを持っていない若者を集めるなら、すべてはうまくいくだろうと希望するだけでは足りないということです。…私は彼らが余りにも理性的なのではないかと懸念します」⁹と、ドミニコやドミニコ会員の愛、愛情、友情について大胆に主張している。

会の初期から、深い、愛に満ちた友情がありました。ドミニコの兄弟姉妹たちに対する友情、ジョルダン・ド・サクスが愛するディアナやアンリに対する友情、シエナのカタリナとカプアのライモンドの友情。…この友情は決して排他的ではなく、苦しみを伴いながらゆっくりと私たちを征服欲や所有欲、温情主義や蔑視から解放し、深く変えていきます。愛が三位一体のいのちを分かち受けるものであるなら、それは同時に相手を高め、解放するでしょう。…もしこの友情が本当に神からのものであるなら、それは、私たちを福音の説教のミッションへと駆り立てるでしょう。…ドミニコ会の伝統の見事な例の一つは、確かに、ドミニコの後を継いで大総長となった福者ジョルダン・ド・サクスとドミニコ会隠世修道女福者ディアナ・ダンドロの間の愛です。…手紙の中で、ジョルダンは常に彼女を主に「与えて」います。彼は花婿の友です。その役割は花嫁を花婿に連れて行くことです¹⁰。

もちろん、ドミニコの「生身の人間」としての成熟した愛が、節制と真理の探究に基づくものであること、またイエスの受肉と聖体の神秘に結びついていることも指摘する。

ドミニコは自由で自然体で心軽くいらっしゃいましたが、そうなることのできた原因の一部はたしかに彼が節制あり、飽食をひかえていらっしゃったからです。彼は兄弟たちと共に祝いの食卓にもつきましたが、また断食もなさいました。…聖ドミニコは、創造されたこの世界を悪とした二元論の宗教の悲劇から人々を救うために修道会を創立しました。私たちの伝統の中心に、はじめから体の価値に対する評価がありました。神は私たちを救うために私たちのように肉と血を持つ人間となり、体をもって私たちに出会いにおいでになりました。私たちの信仰の中心となる秘跡は神の体を分かち得ることです¹¹。

このように、ラドクリフ元総長がドミニコの愛や友情の伝統を語るとき、極めて自然に、人間としてイエスが示した愛までさかのぼっていく。すなわち、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（ヨハネ 15・13）と説いてそれを生きたイエスの愛の秘義、「イエスと弟子たちとの、売春婦との、徴税人との、病人、重い皮膚病をわずらっている人との、そしてファリサイ人とさえもの情熱的な深い愛」、ゴルゴタに向かう受難で最高潮に達する情熱的な出来事を想起させる¹²。そして、「よく均衡のとれた人は友の為にいのちを捨てるのでしょうか？迷った羊を探しに行くために 99 匹を置いていくのでしょうか？売春婦や罪人と一緒に飲んだり食べた

りしに行くのでしょうか?」、「愛することのできる者だけが使徒としての生活の情熱を理解することができるでしょう」と主張する¹³。

賢明さを要することは確かだが、均衡や理性が、一方で人間的な温かみのある実践的な愛を打ち消してしまわないかという危惧である。元総長は、受肉の神秘に立ち返らせる——「神のいのちは私たちが血と肉をもっているところまでおいでになります。…みことばは人となり、ご自分の上に私たちの欲求、情熱、性をおとりになりました」¹⁴。イエスは、自らの人間性、欲求、情熱、性をもって愛を表す。

旧約聖書の中に、神のみ顔が私たちの上に輝くようにという祈りがよくあります。この祈りは、最終的には人間の顔、キリストの顔という形で返事を得ました。キリストは金持ちの若者をごらんになり、彼を愛し、ご自分についてくるようにと求められます。キリストは、庭で、ペトロがご自分を否認した後、彼を見つめられました。キリストは庭でマリア マグダレナをごらんになり、彼女の名を呼ばれました。肉と血にある説教者として、私たちは神のこの共苦共感のまなざしを受肉することができます¹⁵。

イエスが人間性を受け、人々の間で人間味豊かな愛を生きていたことで、神の愛が現実のものとなった。次に、イエスの人間性に根差した霊性に関するドミニコ会士の洞察を見ていく。

2 イエスの人間性

(1) E. スヒレベーク O. P. のアプローチ——「思う」

ドミニコ会士エドワード・スヒレベークは、『イエス——一人の生ける者の物語』の中で、神であり人間となったイエスの神秘を繰り返し簡潔、印象的に表現している——「神が、人間イエスにおいて、その真実の顔をあらわにされたという信仰告白こそ、その特性においてキリスト教に固有のものです」¹⁶、「神の真実の顔はイエスの人間性を通してわれわれに示されている」¹⁷、「イエスは、父に受け入れられたその歴史的な自己譲与を通して、神が誰であることをわれわれに示したのである。〈最高に人間らしい神〉(Deus humanissimus)を示したのだ」¹⁸、「イエスの〈人としての存在〉は、『分かりやすい言葉に言い換えられた神』である。…イエスにおいて、神は、『人の姿での』子という在り方で、われわれにとっての神であろうとしたのだ」¹⁹。

これらスヒレベークの主張は、イエスの人間性と聖性との間に完全な一致があることを表している。イエスがより「人間らしさ」、「人間味」をあらわすにつれ、その聖性、神性が輝いてくる。ところが一方では、「人間臭い」ほどのイエスの奥に聖性を見抜けない人間の弱さがある。福音

書に「見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ」(マタイ 11・19)、「この人は大工の息子ではないか」(マタイ 13・55)といったイエス評が記されているとおりである。スヒレバークは、このギャップを指摘する。

神の救いの計画に秘められた最も深い意図…その意図とは、われわれに「人間の姿で」出会うという神の決意であり、それは、実にわれわれのほうからやがて神を見出すことができるためである。もし、神の救いの目的を讃えるつもりならば、人間イエスの判断に従うのがよい。そうしてはじめて、生ける神へのまなざしを獲得できるだろう。…神のほうは熱意をもって自らを人間の形で現しているのに、われわれの側は、「神的なエイコーン」を崇めるためにこの人間的様相をできるだけ速やかに忘れ去ってしまう²⁰。

福音書を読むとき、また祈るとき、イエスの人間性、紛れもなく人間であったイエスに向かって対話し、イエスを知りたい、生きざまを見たいという意識を、もう少し躊躇せず抱いてもよいのではあるまいか。スヒレバークは、キリスト教におけるイエスの人間的な魅力の重要性について、「生前のナザレのイエスが持っていた魅力…キリスト教伝承は非常に注意深くこの思い出を護ってきたし、この魅力なしにはキリスト教は決して歴史的事実にはならなかったであろう」²¹、「キリスト論の拠り所はナザレのイエスに関する歴史的思い出であった」²²とまで強調する。具体的には、「イエスの生の実践、すなわち、奇跡的行為、徴税人や罪人との交際、彼に従う人々との食卓の交わりにおける神の救いの提供、律法・安息日・神殿に対する態度、そして親しい弟子団との生活における交わり」を挙げ、イエスの宣教した福音の核を、「人間性を思う神」、「人間性を思う神支配」と述べる²³。

イエスは「神から」来る人間の救いが間近かであることを告知した。彼は「貧しい人々へ」神からの「よい知らせ」をもたらす終末の預言者として出現し、全イスラエルのための救いの知らせ——特にあらゆる救いと福利から締め出されていた貧しい人々の喜びとなった。彼は「人間性を思う神支配」を宣教し——それは応答としての実践を求めるが——彼自ら身をもってその生き方を示し、また譬え話と教えによって精力的に表明した²⁴。

続いて、イエスが「人間の事柄」と「神の事柄」を一致させ、それによって自ら生き、満たされ、宣言し、人々に「人間とは『神が心を懸ける存在』である」ことを示したと述べる。

当時の多くの人々は通りすがりに、あるいは他の者は恒常的にイエスと接触することによって、事実、救いと癒しを見出したのである。多くの人々はこうして「新しい生活」に入り、希望を再び獲得し、生命を刷新することができた。イエスは根本的にそのために一度も条件

をつけない。苦しみ悩む人が彼のところに行くと、救いを「無償で」経験するのである²⁵。

イエスは、「人間性を思う神」の思いを受け、その人間的魅力を伴って出会う人々に福音を告げ、救い、癒していった。人間性豊かなイエス、人間的魅力あふれるイエスに、弟子たちをはじめ素朴な民衆、とりわけ貧しい人々が惹きつけられた。

スヒレベークは、日本語版への序文に、「福音化するとは、実際は対話をすることなのです。二人の人間が出会い、そして各人の心に語らせるということを福音はいつも考えます。…福音が事実そのままに真実なやり方で告げられる時、人間性全体はそこから利益を受け、それによってより人間的になるということです」²⁶とメッセージを送っている。福音によって人間性が聖化され、より人間的になるということであろう。

(2) G. グティエレス O. P. のアプローチ——「出会う」

「解放の神学」で著名なグスタボ・グティエレスは、教区での長い司祭生活を経てドミニコ会士となり、2018年には90歳を祝った。ヘンリー・ナーウェンは、グティエレスを「ペルーのスラムに、一人の小さな男が貧しい人びとと住んでいた。何の力も持たないこの男が、一冊の本を書いた。この本の中で男は、貧しい人びとに福音を、盲人には新しい光を、とらわれ人には自由をもたらすために神が人間になったという、キリスト教の根本的真理を、とりかえそうとした」と評している。グティエレスは、貧しい民衆とともに生き、「人びとのうちに住みたもう神」と深く身近に出会い、貧しい民衆から福音を学ぶ深い体験から得た「民衆の霊性」について、『解放の地平をめざして』（直訳では『自分の井戸から水を飲む——民衆の霊的旅路』）と題する著作を書いた²⁷。

グティエレスは、まず、「霊性」についての問題提起から始める。少数派のエリートや閉鎖的なグループのためだけの霊性、「源泉から遠ざかり、手引きや霊的講話といったごく限られた分野に押しこまれ、ついには全く個人的な狭い世界の中でひからびて」いないか、「世俗的な働きに全く興味を持たず、キリスト者を取りまく生身の具体的な人間の存在にも必要にも、きわめて無感覚」になっていないか、の警告である²⁸。

グティエレスによれば、霊性は、「愛と生命の霊に従い、自由のうちに歩むことである。この歩みの出発点は、主との出会いである」²⁹。別の箇所でも、「主との初めての出会いが、従うこと、弟子になることの出発点である。こうして始まる旅路が、パウロの言う『霊によって歩く』道であり、今日わたしたちが霊性と呼んでいるものである」³⁰。また、この著作の表題に関連し、「霊性とは、信仰体験の深みから湧き出る生きた水のようなもの」であり、そして、「どのような霊性にも、ある特定の時に、具体的な人間の遭遇した特定の体験の基盤」があり、「自分の井戸から水を飲むとは、まさに霊的（霊による）体験」であると説明する³¹。

そのようなイエスと弟子たちとの出会いの場면을、グティエレスがいくつか取り上げている。「見る、触れる、従うという親しさ、近さを表現する動詞を使って、福音は弟子たちのイエス体験をわたしたちに伝えている」³²。中でも、ヨハネ福音書の1章35-42節に描かれたヨハネとイエスの出会いは、特に豊かな深い意味を持ち、「主との出会いを描く（おそらくヨハネ自身による）この素朴な物語が、すべての時代のキリスト者の生涯の中で起こる多くの出会いの、ひとつのパターンになる」として、詳細に分析する³³。ヨハネが著した福音書といえば、冒頭部分に「言（ことば）は肉となって、わたしたちの間に宿られた」（1・14）と、まさに神が生身の人間イエスになった神秘を語ったものである。

グティエレスは、ヨハネ自身が描いたイエスとの出会いの中でも、39節の「午後4時ごろのことである」という一文に着目している。

ヨハネは、イエスと出会った時間を忘れなかった。「時は午後4時ごろであった」。人間の生涯においてその跡をのこすすべての出来事がそうであるように、この出会いは、消え去ることのない深い思い出として、出来事のひとつひとつが詳細に記憶される。…この体験をした者にとって、具体的な時間は大いに意味があったのである。そのため、聖書のこの箇所は、きわめて個人的な書き方をしている。大した意味を持たないようなこの時間が、実はたいへん深いメッセージをわたしたちに与えてくれる。わたしたちにはだれでも、人生の午後4時がある。それは、主との深い出会いの時、そこから、わたしたちの霊的生活が養われる時である。これこそ、わたしたちが、しばしば水を飲む井戸なのである³⁴。

12人の使徒の中で最も若かったヨハネである。感受性に富み、直感鋭い青年期にイエスと出会い、その印象深い魅力、忘れがたい体験ゆえに、時刻まで記したのであろう。このように、出発点にはイエスとの出会いと関わり、それぞれ極めてユニークかつパーソナルな信仰体験、生き生きとした霊的体験があり、それを深く味わうことが欠かせない。

グティエレスは、キリスト教信仰の真髄を「ナザレのイエスがメシア・キリストであると肯定すること」と表現する。この簡潔な信仰告白は、教会共同体の中で伝えられ、与えられたものである。

「このイエス」を告白し、「イエスをキリスト」と認めることが、信仰を告白することである。それは、ひとつのアイデンティティの肯定である。歴史のイエス、マリアの息子、ナザレの大工、ガリラヤの説教師、十字架につけられた者は、神の独り子、キリスト、神の子なのである³⁵。

人間となった神イエスとの出会いが土台となって、人間同士も互いにより人間的、靈的に交流できるようになる。

(3) 教皇フランシスコのアプローチ——「魅了される」

ドミニコ会ではなくイエズス会士なのだが、教皇フランシスコが種々の機会に行う講話等では、イエスの生涯における神的愛と人間的愛情・友情に満ちた言行についての黙想、イエスとの人格的な関わりが、折に触れて語られる。「靈操」になじんできた靈性を感じさせる一面でもある。

その教皇の最初の使徒的勧告『福音の喜び』は、冒頭からイエスとの出会いの喜びが主調となっている。「福音の喜びは、イエスに出会う人々の心と生活全体を満たします」(1項)³⁶と始まり、「わたしはすべてのキリスト者に、どのような場や状況にあっても、今この瞬間、イエス・キリストとの人格的な出会いを新たにしよう呼びかけたいと思います」(3項)³⁷と招く。続いて、「この出会いは幸せをもたらす友情になります」(8項)と、イエスを通して神の愛と出会い、友情をはぐくむ幸せを述べる。そして、「人間以上になって初めて真に充実した人間になれるのです。そこにこそ福音宣教の泉があります」と、聖性と人間性とが相関して充満し、福音宣教に結実することを説く³⁸。

教皇は、最終章でも、イエスの愛との人格的な出会いを丁寧に説明している。264項³⁹では、「イエスの前で心を開き、イエスから見つめられるがままに」なること、「愛をもって福音を観想すること、その内容をじっくり考えて心で読むこと」など、具体的な祈りや読書、観想の方法を手ほどきし、「そのようにして福音と向き合うならば、その美しさに驚かされ、そのつど新たに魅了されます」と、イエスとその福音に魅了され続けるよう勧める。この「観想的な精神を取り戻すことが急務」であり、観想的な精神が「人をより人間らしく」と強調する。観想自体が目的ではない。続く265項⁴⁰で、「わたしたちが造られたのは、福音が示すこと、すなわち、イエスと友情を結び兄弟姉妹を愛するためなのです」と目標が示されている。イエスと人格的に出会い、イエスと友情を結ぶとき、「イエスの生涯、貧しい人々に対する接し方、振る舞い、一貫性、日常的で気負いのないやさしさ、そしてその最後の全面的な奉獻、それらすべて」、イエスの人間性と愛、その魅力に惹きつけられる。そして、自分も似たものになろうと、人々を愛することに向かうようになるのである。

266項では、イエスとの友情によって感化される体験を持った人の「熱さ」が印象的な言葉で語られる。イエスとの人格的な関わり方の鍵を示している部分であり、少し長くなるが、次に引用する。

しかしこの確信は、イエスの友情とそのメッセージを味わうという、自らのたえず新たにさ

れる体験によって支えられるものです。自己の体験に裏打ちされた確信なしには、情熱に満ちた福音宣教に精励することはできません。イエスを知っているのと知らないのとでは大違いですし、イエスとともに歩むのと手探りで歩むのとではまったく異なります。みことばに耳を傾けるのとそれを知らずにいるのとでは大違い、イエスを観想し、礼拝し、イエスのうちに憩うのと、そうしないのとでは大違いです。…わたしたちはよく分かっています。イエスがともに歩む人生ははるかに充実したものになり、イエスがともにいてくだされば、すべてに意味を見いだしやすくなることを。だからわたしたちは福音をのべ伝えるのです。いかなるときもイエスの弟子である真の福音宣教者とは、イエスがともに歩み、ともに語り、ともに呼吸し、ともに働いてくださることを知る者です。宣教活動のただ中では、イエスがともに生きてくださっていることが感じられます。宣教活動の中心にイエスの現存を見いだすことがなければ、すぐに熱意を喪失して、伝えていることに確信がもてず、力と情熱を失うことでしょう。信念も、熱意も、自信も、愛情もない者は、だれをも納得させえません⁴¹。

今の時代、イエスはいわゆる五感で触れられるような相手ではない。にもかかわらず、確かに私たちと同じ人間として生きた相手であり、親しい友の一人として同じ関わりができることを表している。

269 項では、福音書の場面から、イエスが「民のただ中に入って行く」こと、「すべての人と近くあること」を見つめている。具体的には、「だれかに話しかけるときにイエスは、深い愛に満ちた心で相手の目を見つめ」、「罪人とともに食べたり飲んだりすること」、「大食漢で大酒飲みだといわれても気になさらないこと」、「罪深い女がご自分の足に香油を塗るままになされたこと」、「夜遅くにニコデモを受け入れられたこと」を挙げ、いかに身近な人間的な愛から始まるかを示す。

この模範に魅了されてわたしたちは、社会へと深く入り込み、すべての人と生活をともにし、人々の不安に耳を傾け、彼らの必要に応じて物質的にも霊的にも協力し、喜ぶ人とともに喜び、泣く人とともに泣き、他者と手を取り合って、新しい世界の建設に打ち込みたいと思っています⁴²。

続く 2 つの項⁴³で、人々のただ中に生きた人間イエスを見つめ、何を望まれているかを説く。「人間の悲惨に触れ、苦しむ他者の身体に触れるよう」、「人間の悲劇の中心からは離れた避難所を個人や共同体に求めることのないよう」、「実際に他者と接して、いたわりの力を知るよう」、「人を見下した君主になるのではなく、人々の中の男となり女となるよう」との願いである。

人間イエスの魅力を強調する教皇フランシスコの霊性について、彼の神学生であったホアン・アイダルは、ウルス・フォン・バルタザールの思想を学ぶよう勧められた経験から、その影響を指摘している。

イエスの弟子たちはイエスが通りかかるのを見て、彼の呼びかけを聞くと、イエスに付き従っていったということです。弟子たちが主と出会って感じた最初の魅力は、疑いなく、「知的な魅力」ではないし（弟子たちはイエスの考えに惹きつけられたのではない）、「倫理的・道徳的な魅力」でもありません（主が行動する方法を見て惹かれたのでもない）。それは、何か言葉ではとても説明しがたい魅力ですが、…バルタザールの考えによれば、最初に弟子たちをイエスに惹きつけたものは、「美」という言葉の最も深い意味において、イエスという人の「美しさ」です。…そこで弟子たちは、イエスに伴われるなかで、彼の限りない善良さと優しさ、深い憐れみ、苦しむ人々への同情などを経験していきます⁴⁴。

イエスの人間としての真の「美しさ」に魅了されることが、イエスの弟子、友となって隣人へと向かう第一歩になる。「正しさ」を誇示する場合には、多くの場合、理論や議論が入って立ち止まってしまうが、「美しい」と感じれば、人は理屈抜きで従っていくものである。ほんとうに人間らしい、魅力ある美しい人に会いたいならイエスを尋ね求めて出会えばいい、真に人間らしい生き方、愛し方を知りたいければ、イエスと関わればいい、ということである。

教皇フランシスコは、新しい使徒的勧告『喜びに喜べ——現代世界における聖性』でも、日常生活における聖性と人間性の結びつきを語る⁴⁵。まず、一人ひとりにそれぞれの完徳の道があり、「倣うのは到底無理だと思える聖性の手本」を思い浮かべたり、「求められていないものをまねしようとして疲弊」したりすることは無意味であること⁴⁶、「すでに神のみもとにいる聖人たちは、わたしたちを守り、支え、担ってくれること⁴⁷を明言する。また、大抵は「わたしたちのすぐ近くで神の現存を映し出す『身近な』聖性」⁴⁸であり、「主があなたを招いているこの聖性は、小さな行動を通して成長」する⁴⁹とも指摘する。「独りになることも勤労も、内的生活も福音化の任務もどちらも含まれ」、ともに満たすことのできる聖性の精神が必要であり⁵⁰、「いっそう生き生きと、いっそう人間らしく」⁵¹と、次のように励ます。

神に愛していただき、自由にさせていただくために身を任せられるよう、高みを目指すことを恐れてはなりません。聖霊に導かれるがままになることを、恐れてはなりません。聖性は、あなたの弱さと神の恵みの力の出会いなので、あなたから人間らしさを奪いはしません⁵²。

第三章では、「真福八端」の一つひとつを取り上げながら、聖なる者とはどういう人であるのかを具体的に考察し、聖人であるとは、「自称的な恍惚状態の中でうっとりしていること」ではなく、最も貧しく小さな人々への愛を通して神を生きることと述べている⁵³。第四章では、教皇は聖性の道につながる生き方を理解する上で不可欠な要素として、「辛抱、根気、柔和」⁵⁴、「喜び、ユーモアのセンス」⁵⁵、「大胆さ、熱意」⁵⁶といった特徴を挙げていく。そのうち「喜び、ユーモアのセンス」では、「臆病で、悲しげで、不愛想で、沈んだ心とも、生き生きした表情のない顔とも違い…聖なる人とは、喜びと、ユーモアのセンスをもって生きることのできる人です。現実に立脚することを忘れず、前向きな希望ある心で人々を照らします」⁵⁷と説く。続いて、「イエスがご自分の弟子や市井の人々と過ごした交わりの生活」⁵⁸、「小さなことにも気を配るようにと、イエスが弟子たちにどれほど促したか」⁵⁹ということをもとに、「ささやかな愛情表現を大切にする共同体」⁶⁰的聖性に言及する。なお、不断の祈りは欠かせない。聖人とは、「神とのつながりに必要な祈りの心をもつ名人」、「この世の閉じた内在性で窒息することに耐えられず、努力と献身をもって熱い思いで神を慕い、賛美に没頭し、主を黙想することで己の限界を克服していくのにたけた人」と述べ、祈りが長くなくても、感情を高ぶらせたりしなくてもよいが、「祈りのない聖性をわたしは信じていません」⁶¹と明言する。さらに、この使徒的勧告においても、イエズス会士らしい祈りの手ほどきが見られる。死んで復活されたイエスの御顔を観想することは人間性を回復させ、たとえ、人間性が苦しい生活で壊され、罪で傷つけられても、キリストのみ顔のもつ力をおろそかに思ってはならないという。

沈黙をもって主の現存に身を浸し、じっくりと主と過ごし、主に見つめていただく時間をもっていますか。主の火を自分の心に燃やしていただいていますか。主の愛と優しさの熱を注いでいただかなければ、火を手にはすることはありません。…キリストを目の前にしてもなお、いやされることも、変えられることもないならば、主のはらわたの中に、主の傷の中に入りなさい。神のいつくしみは、まさにその場所に宿っているからです⁶²。

死んで復活したイエスと向き合う祈りが、わたしたちの人間性を支えることを説いている。

3 ドミニコ会的生活における人間性と聖性の探求

イエスとの出会いで表現される個人の信仰体験、霊的体験が、独善的な幻想でなく、いわば健全であるなら、信仰生活を歩む中で、決して閉鎖的、排他的、個人主義的なものではなく、共同

体的側面を帯びている。グティエレスは、この経緯を説明する。「イエスに従うことは、根本的に個人的な問題ではなく、共同体的冒険である。神の民の旅の出発点は、共同体における、主との直接の出会いである。『わたしたちは、メシアに出会った』」⁶³。「偉大な靈性は、つねにある体験をもつことから始まる。つぎに、この体験の考察が行なわれ、キリストに従う道として、キリスト者の共同体に提案される」⁶⁴。ただし、「唯一絶対のものとしてではなく、キリスト者の生き方の一つとして」示され、「世紀を越えて伝わり、イエスに従う適切な道として、役立って」いく。したがって、「フランシスコ会、ドミニコ会、イエズス会、カルメル会などの靈性は、今日でも、わたしたちに訴えるものを十分持っている…これらの靈性の生まれ出た靈的体験の深さと、神学的考察の広さによって、現代においても、生命の通った、ダイナミックな靈性として続いている」ものである⁶⁵。このうち、ドミニコ会の靈性、ドミニコ会的使徒的生活の主要な要素には、共同生活、福音的勧告の誓願、典礼の共同祭儀、祈りと苦行、勉学、修道規律の順守がある。逆にいえば、各会員のドミニコ会的召命と、ドミニコ会的奉献生活のこれらの要素は、イエスとの出会い、個人の信仰体験、靈的体験なしにはあり得ないということになる。

前章において、イエスの人間性、またドミニコの人間性が、聖性の輝きにつながっていることが明確化してきた。そこで、イエスに従い、またドミニコに続く会員が、どのように人間性・聖性を探求すればよいかをまとめていく。

ラドクリフ元総長は、人間性と聖性とを相伴って探求し、「人間の顔をもって神のための顔となる」ドミニコ会的召命を語る——「説教者であり兄弟である人は、苦しみながら、また多分非常に努力をして、まさに、ほほえみ、笑い、泣き、心配を表わし…人間の顔をもって神のための顔となるとは何を意味するかを学ぶでしょう」⁶⁶。これは、「祈りと苦行」なしにはできない。

そして、現総長ブルーノ・カドレは、書簡『ドミニコの聖性』で、ドミニコ会員の目指す人間性と聖性との一一致に言及する。

ドミニコの人間性を主張することは、彼自身の徳性を強調するばかりでなく、どのように説教者になることを願ったかの説明にも役立ちます。私達の間に住まいを設けるために来られた方の証しになりたいと願ったこと、そして、神が会いたいと思う人達の心の中で神を第一の場に置くために、自分は退きたいとドミニコが願ったことは、彼の人間性を全開することによって、誰とも親しくなることによってです。説教者会について尋ねられた時、福者ジャン・ジョゼフ・ラタストは、「神の友人達の会」です、と答えました。この答えはおそらく、会の兄弟姉妹達が、いかに互いと共に生き、神と共に生きることを願っているかということの描写であり、彼らの説教の最終的状态——神の友情の中でのすべての人の交わりの究極的な状態に常に向かって、彼らが教会に差し出すことを意図している「言葉と模範」の説教の

最終的狀態——を示すしるしです⁶⁷。

総長は、ドミニコが、「人間性を全開」し「誰とも親しくなる」、「互いと共に生き、神と共に生きる」ことの模範であり、「神の友人」が兄弟姉妹として集められたドミニコ会的生活の究極的な状態は、「神の友情の中でのすべての人の交わり」であることを明言している。この到達点に向かって、先に挙げたドミニコ会的使徒的生活の主要な要素——共同生活、福音的勧告の誓願、典礼の共同祭儀、祈りと苦行、勉学、修道規律の順守——が寄与していく。そして、総長のいう「最終的狀態、究極的な状態」は、修道共同体から教会共同体へと、また教会を超えたあらゆる人々と種々の共同体にまで及ぶべきものである。

一方、グティエレスは、伝統的な修道会の霊性と別の体験や展開をもつ霊性についても示す。南米には「希望に満ちた深い祈りの生活」、「無数の名も無い村々で、日々繰り返される謙遜で素朴な祈り」、「キリスト者である貧しい人びとの共同体の日々の苦しみと闘いから生まれる熱烈な喜ばしい祈り」がある⁶⁸。グティエレスは、イエスと出会う、この「民衆の霊性」の体験について述べる。

今日南米において、多くのキリスト者が学びつつあることは、イエスに従うためには貧しい人びとと共に歩み、貧しい人びとに献身しなければならないという真理である。そのとき、かれらは貧しい人びとの顔に顕われ、またかくされている主との出会いを体験するのである（マタイ 25・31-46、プエブラ文書 31-39 項参照）。イエスに従い、イエスの言葉と行いを深く味わうための出発点となるのが、この深い、きびしい霊的体験なのである⁶⁹。

南米で、多くのキリスト者、特に司祭・修道者が、貧しい人々の生活、「民衆の霊性」から学び、イエスと出会い、その人間性、聖性を体験しているという。聖性の探求は、司祭・修道者の特権でも専権事項でもない。あらゆる人に開かれている。それぞれの立場、生活の場に応じた「召命」、各自が生身の人間としてユニークな使命を帯び、聖性を探求していく。

同じく南米出身で「民衆の霊性」、民間信仰の重要性を説く教皇フランシスコ⁷⁰は、枢機卿時代の国際会議でのスピーチの中でヨハネ・パウロ二世の言葉を引用し、「信仰と文化の共生とは、『生気のない抽象的なものではなく、溢れ出る生命力の実存です。この共生においてこそ、信仰の神秘が日常の暮らしの真ん中に、すなわち研究や教育、仕事の中に、あるいは温かく親密な人間同士または民族同士の共生の中に、立ち現れるのです』⁷¹と述べた。各自の人間的な日常生活に現れる信仰、聖性のテーマは、教皇となって発表している使徒的勧告でも継続的に扱われている。

ドミニコ会員にとって、確かに修道者としての立場、生き方から探求する聖性はある。しかし、

まずは一人の人間として探求する人間性、民衆あるいは庶民として探求する聖性、いわば生活感覚と体温のぬくもりのある霊性の探求を忘れてはならない。

おわりに

教皇フランシスコのような、また聖ドミニコのようなイエスとの関わり方、友情に隔たりを感じる日本人は少なくないかもしれない。一般的に、日本を含む東アジアでは、無意識のうちに「儒教的」な精神風土、抽象的な神観念が根付いていると言えるのではなからうか。「～道」の文化、価値観もなじんでいる。もちろん、それぞれ独自の文化、思想として貴重な宝であり、またキリスト教と結びつく要素があるともいわれる。ただ、道徳的、規範的、あるいは律法的とさえいえるであろうか、いわば人が主語・主役で、しばしば、「～べきである」、「～なければならない」という捉え方が先走りがちである。例えばミサの説教でも、大まかな言い方だが、一般的に東アジア出身者の説教に、教訓的な傾向がしばしば感じられる。ともすると、「福音」が文字通り福音の「よい知らせ」として受けとられにくいという恐れもある。

一方、聖書的な世界では、確かに律法は重要だが、神が主語・主役でイニシアティブを取り、人はそれに応答する。主体性を失っているわけではない。人が「すべきこと」に、神の人格的な呼びかけが先立っている。特に、新約聖書、ヨハネの手紙にいうとおり、「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。…愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。…わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです」(Iヨハネ4・9、11、19)。人間は愛し合う「べき」だが、神が人間となって先に人間を愛したから、その独り子、人間イエスを見れば、何をすべきか、というより何をすればよいか、何ができるか、いかに愛するかが自ずからわかるということである。一足飛びに「べきである」ではなく、イエスと出会い、人間イエスの具体的なモデルを見つめる、自分の人間的な弱さも含めてありのままに関わるという過程があつての人格的な応答ということである。

現代の一般社会において、「コミュニケーション力」を問われることが多い。人間性、聖性の探求というのは、「神とのコミュニケーション」、「人とのコミュニケーション」の積み重ねであり、言ってみれば、「傾聴力・観想力・預言力」、そして「人間力」が問われることである。伝統的にもいわれるように、「祈りとは神との対話」である。定型の祈りであれ個人の祈りであれ、神との対話、コミュニケーションであることをより意識したいものである。確かに目に見えない相手だが、人間性を備えたイエスとなった神であることも、また真理である。幻想を警戒しつつ、人間らしい友情、愛情をはぐくむ対話、祈りが大切であろう。ドミニコとそれに続く会員たちが

示してきたように、また誰よりもイエスがそうであったように、普段から、直接、間接に出会う周りの人を通して、人間の哀しさと美しさを知ること、そしてそれを神と語り合えること、真の意味の優しさは、そこから生まれてくる。

福音宣教には、豊かな人間性とその延長線上にあるともいえる聖性とが必要である。宣教にあたって、宣教者の人間性が大きな要素、影響力を持つことは否めない。その意味でも、信仰生活、霊的生活において、自分自身の人間性を磨き、高め、豊かにすることは欠かせない。まずは、ひとりの人間として、「民衆」のひとりとして、周りの人々と苦楽を共にする普段の日常生活を丁寧生きることから始まる。それは、自分のためではなく、宣教者がイエスの人間性を通して現わされた神の恵みを伝える道具となるためである。宣教者が心して、洗礼者ヨハネの謙虚さ——「あの方（イエス）は栄え、わたしは衰えねばならない」（ヨハネ 3・30）——や、パウロの謙虚さ——「わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝えています。わたしたち自身は、イエスのためにあなたがたに仕える僕なのです」（Ⅱコリント 4・5）——を忘れないなら、自己中心、自己満足、自己顕示には陥らずに、人間性と聖性の探求ができるであろう。

注

- 1 教皇フランシスコ使徒的勧告（カトリック中央協議会事務局訳）『喜びに喜べ——現代世界における聖性（2018年3月19日）』カトリック中央協議会、2018年、2項。
- 2 ブルーノ・カドレ 2018年総長書簡『ドミニコの聖性——説教者会への光』（2018年8月6日、瀬戸ドミニコ会聖ヨゼフ修道院訳）。
- 3 総長書簡『ドミニコの聖性』、1頁。
- 4 福者ジョルダヌス・デ・サクソニア『説教者修道会創立史』（ヘスース・G・バリエス O.P. 編 佐久間正他訳『星に輝く使徒』中央出版社 1970年、所収）、「聖ドミニコの死」117-118頁。
- 5 ペドゥロ・フェランド『聖ドミニコ伝』（同上）、51-53頁。
- 6 前掲『説教者修道会創立史』、123-124頁参照。
- 7 総長書簡『ドミニコの聖性』、「御子の姿に似た説教者の人間性」、4頁。
- 8 同上、5頁。
- 9 ティモシー ラドクリフ 1998年総長書簡「いのちの約束」、『ドミニコ会士（説教者兄弟会第85代総長）ティモシー ラドクリフ書簡集』、聖ドミニコ女子修道会、2004年、135-136頁参照。
- 10 同上、138-139頁参照。

- 11 同上、144 頁。
- 12 同上、137 頁。
- 13 同上、136 頁。
- 14 同上、140 頁。
- 15 同上、145 頁。
- 16 エドワード・スヒレベーク O. P. 、ヴィセンテ・アリバス 塩谷惇子 訳『イエス——一人の生ける者の物語』(第一巻)、新世社、1995 年、「日本語版への序文」、xiv 頁。
- 17 エドワード・スヒレベーク O. P. 、ヴィセンテ・アリバス 井原彰一 訳『イエス——一人の生ける者の物語』(第三巻)、新世社、1999 年、234 頁。
- 18 同上、238 頁。
- 19 同上、239 頁。
- 20 同上、241 頁。
- 21 前掲 (第一巻)、258 頁。
- 22 同上、306 頁。
- 23 同上、340、307 頁。
- 24 同上、344 頁。
- 25 同上。
- 26 同上、xviii 頁。
- 27 グスタボ・グティエレス著/日本カトリック正義と平和協議会訳『解放の地平をめざして——民衆の霊性の旅』(原題は『自分の井戸から水を飲む——民衆の霊的旅路』) 新教出版社、1985 年。
- 28 同上、27 頁。
- 29 同上、56 頁。
- 30 同上、87 頁。
- 31 同上、59-60 頁。
- 32 同上、61 頁。
- 33 同上、62-68 頁参照。
- 34 同上、67 頁。
- 35 同上、74 頁。
- 36 教皇フランシスコ使徒的勧告 (日本カトリック新福音化委員会訳・監修)『福音の喜び (2013 年 11 月 24 日)』カトリック中央協議会、2014 年、1 項。
- 37 同上、3 項。
- 38 同上、8 項。

- 39 同上、264 項（わたしたちを救うイエスの愛との人格的な出会い）。
- 40 同上、265 項。
- 41 同上、266 項。
- 42 同上、269 項。
- 43 同上、270、271 項。
- 44 ホアン・アイダル「教皇フランシスコの神学」、片山はるひ・高山貞美編『福音の喜び 人々の中へ、人々と共に』日本キリスト教団出版局、2016 年、25 頁。
- 45 以下、<http://ja.radiovaticana.va/news/2018/04/09/教皇、「聖性」をテーマに、使徒的勧告発表/1369830>（2018-4-10）参照。
- 46 前掲、教皇フランシスコ使徒的勧告『喜びに喜べ——現代世界における聖性』、11 項。
- 47 同上、4 項。
- 48 同上、7 項。
- 49 同上、16 項。
- 50 同上、31 項。
- 51 同上、32 項～34 項の見出し。
- 52 同上、34 項。
- 53 同上、96 項。
- 54 同上、112-121 項。
- 55 同上、122-128 項。
- 56 同上、129-139 項。
- 57 同上、122 項。
- 58 同上、143 項。
- 59 同上、144 項。
- 60 同上、145 項。
- 61 同上、147 項。
- 62 同上、151 項。
- 63 グティエレス、前掲、68 頁。
- 64 同上、83 頁。
- 65 同上、85-86 頁参照。
- 66 ラドクリフ、前掲、145 頁。
- 67 ブルーノ・カドレ、前掲、5 頁。
- 68 グティエレス、前掲、37 頁参照。
- 69 同上、60-61 頁。

70 前掲、教皇フランシスコ使徒的勧告『福音の喜び』、123-126 項、参照。

なお、2018 年 6 月、教皇フランシスコは、「解放の神学の父」グティエレス神父の 90 歳の誕生日を祝って手紙を書き、その「神学的奉仕と、貧しい人々や社会から捨てられた人々に対する優先的愛を通しての教会と人類に対する」貢献に感謝した（『カトリック新聞』2018 年 6 月 17 日号参照）。

71 ホルヘ・マリオ・ベルゴリオ（現教皇フランシスコ）「キリスト教信仰とヒューマニズム」（1985 年アルゼンチンのサンミゲル大学神学部における国際会議でのスピーチ）、上智大学神学会『神学ダイジェスト』123 号、2017 年、50 頁参照。